

がん等の治療と妊孕性温存治療について

近年、診断技術や治療方法の進歩にともない、がん等の診断の後に継続的に治療を受けている人や、治療を終えた人たちが増えています。その中には小児を含めた若年の人々も多くいます。このような若年がん等の患者さんへの治療のリスクのひとつに、“妊孕性(にんようせい)”の低下というものがあります。

●妊孕性とは？

妊孕性とは「妊娠するための力」のことで、卵子や精子、性機能や内分泌のはたらきを指します、これは女性、男性両方に関わる機能です。

●がん等の治療と妊孕性の関係

がん等の治療には抗がん薬を使用した化学療法や放射線治療などがありますが、これらの治療はがん細胞だけでなく、健康な細胞にも影響を与えます。がん等の治療により、男性では精巣、女性では卵巣や子宮などの機能が影響を受けることにより、妊孕性が低下し治療後に子供を授かることが難しくなる場合があります。

●妊孕性温存治療とは？

将来子どもを授かる可能性を残すために、がん等の治療前に卵子や精子、受精卵の凍結保存を行い、がん等治療後にこれらを用いて妊娠・出産を目指す治療法です。

●妊孕性温存治療の対象は？

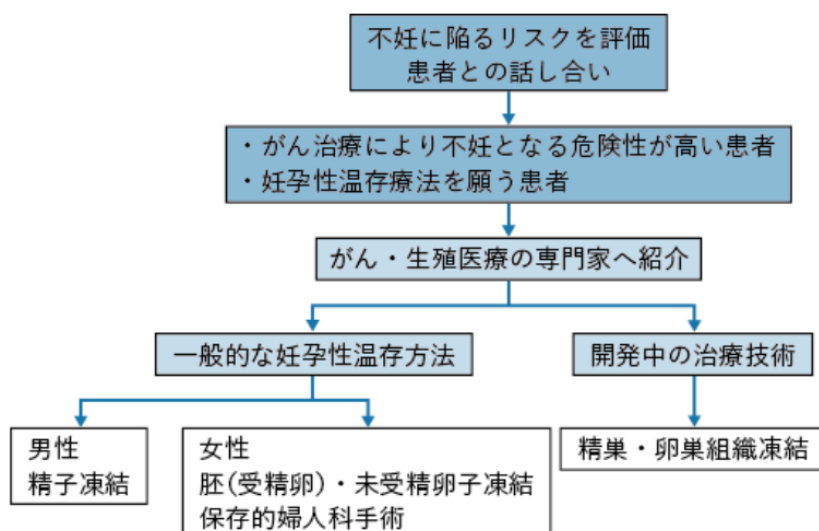
小児、思春期・若年のがん患者さんなど、「生殖年齢」でがん等の治療を開始する患者さんが対象となります。なお、妊孕性温存にあたっては、がん等の状態を考慮する必要があります。疾患の種類、進行のスピード、全身状態によっては妊孕性温存治療に時間をかけることが治療計画に大きな影響を及ぼす、あるいは命にかかわる危険をもたらす可能性があります。そのため、場合により妊孕性温存が勧められないこともあります。

●精子や卵子、内分泌に影響を与える代表的な薬剤は？

女性では抗がん薬治療により、一時的な無月経を引き起こすことがあります。また、シクロホスファミド、イホスファミド、ブスルファン、プロカルバジンなどのアルキル化薬やシスプラチンのような白金製剤は、卵巣への毒性から卵子数を減少させることがあります。男性においても、精子をつくりだす精原細胞の数を減少させることが知られています。

なお、抗がん薬には、このような性腺機能に大きく影響するものと、ほとんど影響しないもの、影響が不明確なものがあります。詳細は医師・薬剤師にご確認ください。

●妊孕性温存までの大きな流れ



●妊孕性温存を希望する場合は？

疾病の種類や病状によっては、がん等治療の早期開始が最優先されるケースや妊孕性温存には合併症もあります。また、抗がん薬だけでなく、放射線治療や手術でも妊孕性に影響がでる場合もあります。まずは、がん等の治療を担当する医師に相談してみてください。

